



大阪商業大学 FD ニュースレター

第7号

2010年9月発行

平成 22 年度 公開授業を終えて

総合経営学部 公共経営学科 教授 木村 雅文

平成 22 年度における本学 FD 活動の 1 つとしての公開授業は、下記の日程と授業科目について行われ、無事終了した。

月 日	時限	科 目 名	担当教員名	教室
6 月 21 日(月)	2 限	コンピュータ英語	小磯かをる	LL
	5 限	社会科学方法論	保田 時男	632
6 月 22 日(火)	4 限	犯罪学	崔 鍾植	961
6 月 23 日(水)	3 限	基礎ドイツ語(再)	新宮 潔	436
6 月 24 日(木)	2 限	金融システム論	伊東 眞一	412
		生涯スポーツ論 I	久保山直己	951
	3 限	商学総論	金 度洵	412

平成 20 年度から始められた公開授業も、3 年目になって軌道に乗りかけてきた感じである。さらに、本年度の反省点を踏まえ、来年度以降もより充実した形で実施していかなければならないように思われる。

さて、22 年度の公開授業実施にあたっては、以下のような方針でのぞむことになった。

①本年度は、昨年度とは反対に公開授業を前期に、学生の授業アンケートを後期に行う。②本年度新任の教員を含めた若手教員とベテラン教員とのバランスをはかるとともに女性教員の授業が入るようにする。③主専攻科目と副専攻科目とのバランスをはかる。④受講生の多い授業(大教室)と少ない授業(小教室)のバランスをはかる。⑤参観者を増やすべく教授会において公開授業実施のアナウンスを行い、広く参加を求める。⑥授業終了後、学生に当該授業の感想と改善点を書いてもらう簡単なアンケートを行う。⑦授業終了後、授業担当者と参観者との間での意見交換を 10 分から 15 分ほど行う。⑧後日、拡大 FD 委員会を開き、授業担当者にも出席をお願いして本年度の公開授業にあたっての感想や授業を充実させるについての提案、問題点などをテーマに議論する場を設ける。

以上は、ほぼ所期のとおりに行うことができた。このうち⑧が本年度に加わった点であるが、限られた時間であったものの、別記のように熱心な話し合いが行われたことは成果だったといえよう。ただ、参観者を増やすことについては課題が残ってしまった。授業の公開を快く承諾して下さった先生方をはじめ、時間を割いて参観された先生や準備にあたられた教務課職員の方々、アンケートに協力してくれた学生の皆さんに心より感謝を申し上げたい。

それでは、既に、小・中・高などの教育段階では、教員の研修などを通じて広く行われている公開授業を、大学においても実施する意義はどこにあるのであろうか。これには、言うまでもなく、大学への進学率向上に伴うユニバーサル化という構造変動が挙げられるものと考えられる。ユニバーサル化とは、よく知られているように、アメリカの教育社会学者 M・トロウによってエリート、マスに続く高等教育普及における第 3 段階とされており、進学率(在学率)が 50%を超え、希望者がほぼ全員入学できるように



右写真・公開授業全体報告会の様子

なるぐらいに高等教育が普遍的な広がりを持って拡大するに至った段階である。かねてから、わが国の四年制大学と短期大学などを合わせた高等教育全体への進学率は、50%をかなり超えていた。そして、昨年度になって四年制大学だけでも進学率が50%超えに達したという記録が残ることになった。その一方で、大学間の生き残り競争がますます激しさを加えていることは改めて指摘するまでもない事実であろう。

この結果、大学は、かつての研究中心機関から、教員の研究成果の進歩を重視しつつも広範な学生への教育中心機関へと性格を変えざるを得なくなってきた。しかも、大学にとっての教育目標は、もはやエリートの養成に限られるのではなく、ほぼ全国民に普遍的に必要とされる知識や教養を持った社会人・職業人を世に送り出すことになったといえよう。かかる課題は、多様な能力と関心を持った学生が在籍する中堅校である本学にとって特に重要である。これまでの教育の骨組みである本学のカリキュラム改革は、かかる目標に対して良い方向に進んでいると思われる。しかし、その上に血肉になる授業の充実は、一層欠かせない事項である。

私は、過去3年間の公開授業から、各先生が工夫を凝らして授業を実践されていることを参観し、大いに参考になった。また、昨年度には、自分の授業を公開することで多くの貴重な意見を得ることができた。自分ひとりだけではなかなか変えられないことでも、他の人を見たり、他の人から聞いたりすれば改めて考え直してみようとするものである。最近まで、大学の授業は、とりわけ担当教員が自分の講座を自己責任で行うものとされていたために、教授の唯我独尊に陥ったような事例がマスコミなどで「大学の時代遅れ」として報じられたこともあった。しかし、もうこのようなことは許されないであろう。

私は、本年3月に同志社大学を会場に開催された(財)大学コンソーシアム京都主催の第15回FDフォーラムに出席した。このフォーラムのテーマは、「学生の学びを支える一つなぐFDの展開」というもので、授業改善のための大学内における学生、職員、教員をつなぐFDと県内や広域間の大学間をつなぐFDについての先進的な実践例が紹介され、かなりの刺激を受けたことは否定できない。ここで出た「つなぐ」とは、言い換えれば組織化ということであろう。これからの大学教育は、教員の学問や教育の自由を尊重しつつも、教育目標達成のために一段と組織化の方向に進んでいくに違いない。公開授業において、教員が意見を交換し、参観を通じて改善に役立たせるヒントを得るのは、その第一歩である。

■目次■

- P. 1 平成22年度 公開授業を終えて
総合経営学部 公共経営学科 教授 木村 雅文
- P. 3 公開授業実施後の感想と課題
総合経営学部 商学科 講師 金 度淵
- P. 4 公開授業を終えて
総合経営学部 公共経営学科 准教授 久保山 直己
- P. 5 公開講義を終えて
総合経営学部 公共経営学科 准教授 崔 鍾植
- P. 6 公開授業全体報告会、開催される
教務課 鈴 加奈子
- P. 7 FD研修会(於:滋賀県立大学)に参加して
経済学部 経済学科 講師 谷山 英祐
- P. 8 編集後記

■公開授業実施後の感想と課題

総合経営学部 商学科 講師 金 度 洸

去る6月24日(木)、3時限目の担当科目である「商学総論」の公開授業の機会をいただき、講義への取り組みについていま一度深く考え、反省する機会を得ることができた。これまで私はパワーポイントを活用し、キーワードの穴埋め形式による授業(事前にレジュメを配布)を行なってきたが、パワーポイント講義にはメリットばかりでなく、デメリットがあった。パワーポイント講義のメリット、デメリットに関しては、すでに中嶋嘉孝先生(総合経営学部)が「FDニューズレター第5号(2009.12, p.3)」にまとめられているので、本稿ではそれを参考にしつつ、さらなる論点を提示しておくことにしたい。

まずパワーポイント講義のメリットについては、第1に、黒板書きの時間を削減したことによって内容説明に十分、時間を使うことができる点あげられる。第2に、穴埋め形式の講義はスライドとスライドの間に筆記の時間を設けるため、受講生はキーワード筆記に集中できると考えられる。この時間に教員は講義の説明内容を再確認できる。第3に、文字の特徴を生かした講義(文字中心の講義)だけでなく、映像(ビデオ、新聞、統計資料を含む)を活用した講義を展開することができ、具体的な事例の提示によって受講生の理解を促すことができる。このことは、理論(例えば枠組みの図式化)、歴史(例えば歴史における法則の観念や一般化の意味)、現状分析(例えば実態からの特殊性)を総合的にとらえ、受講生の理解力の増大に貢献できうるものと考えられる。

他方、パワーポイント講義のデメリットについては、第1に、キーワードの穴埋め形式のレジュメ配布による授業のため、キーワード以外の内容に関しては相対的に集中度が欠如し、講義全体の理解に支障をきたす可能性がある。第2に、筆記の分量を減らすことによって、漢字の読み書きなどを含めた語学能力の低下の可能性がある。このことは専門用語の習得と基礎言語の理解を減退させかねない。



総括するとパワーポイントのみによる講義展開は決して万能な方法とはいえない。それは1枚のスライドに示される文字数と映像には限界があるからである。そのため、パワーポイント講義と同時に、必要な時には黒板に補足的に書き込み、1枚のスライドごとに時間をかけて十分に説明し、理解を促していく必要がある。つまり、パワーポイント講義と筆記式講義のバランスを考え、より理解しやすい講義を目指す必要がある。

一般論としてパワーポイント講義は、教員の黒板書きの時間や労力の軽減のための手段として活用されてきたきらいがある。しかし、単に文字情報を並べせるのではなく、事前に穴埋め形式のレジュメを配布(再配布は一切ないことを受講生に通達)すれば、教員と学生相互の負担を軽減させつつ、受講生のキーワードへの集中力を高められ、それに関する関心や興味を引きだし、科目に関する理解を総合的に高められるように思われる。また、パワーポイント講義によって短縮された筆記の時間を、ビデオ視聴や新聞記事の提示を通して限られた講義時間を有効利用すれば、とりわけ受講生が新聞に接する機会を増やせ、実践(実学)に強い学生の育成にも貢献できうるものと考えられる。パワーポイント講義はそれ単体ではなく、同時に実態を把握できる何らかの媒体を受講生に提示する必要があると考える。

講義は「わかりやすさ」を提示するだけでなく、とりわけ1年生には「関心が持てる」講義を、2年生には「面白さが分かる」講義を目指し、全体として実践的な思考ができる講義を目指さなければならないように思われる。そのためには講義中に回収する出席カードや小テスト用紙にできるだけ授業への要望(取り上げてほしい企業やブランド名など)を書いてもらい、最大限受講生の意見を取り入れていく必要があるだろう。

最後に、大変お忙しい中に私の未熟な講義をご参観して下さった先生方に深くお礼を申し上げたい。今後も多くの先生方にご教示をいただきながら、より良い授業環境になるよう講義の改善に努めていきたい。



■公開授業を終えて

総合経営学部 公共経営学科 准教授 久保山 直己

公開授業を行うに当たり、改めて大学での授業とは何か、学生は大学でなにを学ぶのかということを考えることができ、私にとってよい機会となった。授業を終えて改めて振り返ると、授業を通し学生には視野を広げ自分の能力を発見し将来に役立てられる授業に改善していくことが必要であると感じた。大学での授業とは、「自己の本質を発見し、自己を広めたり深めたりすることによって、自己の価値と可能性を高める成長のための機会」であると思う。授業から得られる最も基本的な財産は「知識・情報・技能」である。学生には授業を通して体験的に知識・情報・技能を身につけてほしいと強く思う。

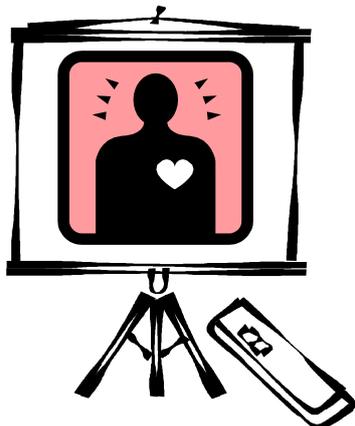
近年、大学への進学率が増加した。入学する学生の能力も志望も様々である。大学の方もその水準が千差万別となりどういう教育をするのかも多様化している。さらに、最近の学生の多くが無気力、無責任、無関心、無感動、無作法、無神経などと言われ、あまり良いとは言えない評判がある。この様な状況を批判するだけでは問題は解決しない。一方、学生の方は大学を就職なり職業なりのための方便と考える見方が強くなっており、何を学ぶかというよりはどのようにして卒業単位を揃えるかに懸命である。

確かに、卒業資格や専門資格を習得するためには一定の単位を取得しなければならない。大学を無事卒業しなければ就職も厳しい現状もある。効率よく単位を取得するためか、学生は出席すればよくノートをとる。授業にはよく出るが予習や復習をしない。どういうことなのか。学生は試験のためにノートをとるのであって、学生自身の視野を広げ能力を高めるためではないのではなからうか。つまり、学生は受け身の姿勢で授業を受講している。高校生までは、教科書や参考書に書かれていることを多少整理し、覚えることが必要であった。しかし、大学では異なる。経済学でも経営学でも、また健康科学でもその視点に立ってものの見方ができるようになることが大切である。授業に出てノートをとるだけでは不十分である。授業をもとにして、もう一度自分で考えてみて、わからないことがあれば参考書を読むとか、先生や友人と議論するとかという自主性こそ

が必要である。

公開授業は6月24日(木)2限 951教室にて生涯スポーツ論Iを行なった。この授業は1年生から4年生までの複数の学科の学生が受講し200名を超える。初回講義のときに、受講時の出欠、遅刻の取り扱いや受講態度などについて学生と互いに確認を行った。出席は出席票により行い、遅刻は30分までとしそれ以降は欠席扱い、私語や携帯などはしないなどであった。現状はその確認が完全に浸透しているとは言えず、時折注意を促さなければならぬ。私は講義中の私語や携帯などはマナーとして注意するようにしている。しかし、考えてみると、本来講義では遅刻や私語などを抑制するために時間を割くのではなく、学生が講義に興味や関心を持てるように工夫することに力を注ぐべきである。学生が興味関心を持てる講義となるよう工夫すれば、自ずと受講態度は改善していくのではないだろうか。教員からの一方的な知識の伝達のみの方では学生の興味関心を引き出すことは難しい場合がある。講義での工夫には色々な方法がある。私は、文字情報や視覚教材、あるいはディスカッションなどを入れ、テキストには書いてない教員が持つ情報の提供や解釈など体験的な学びができるように意識している。体験的な学びを重視した講義は興味や関心を引き出しやすいと共に学生の受講態度の改善にもつながると考える。同時に学生自らが主体となり自己の価値や可能性を高める機会となるのではないかと考える。私はそのようなことを念頭に置いて、講義中は、できるだけ多くの学生に質問し発表させ、その発表について他の学生が意見を述べるようにディスカッションの場を設けたり、講義の終わりには問題を提起し小レポートを書かせ自分の考えをまとめさせるようにしている。自分の考えをまとめる作業は、自分が言おうとしていることを正確に理解し、自分の頭で整理する力を伸ばすためには重要である。これまでの知識を基盤として、自分で問題を発見したり問題にぶつかったとき自分で考えることは自主的に学ぶことであり、自己能力を高めることになる。私は視覚教材も利用している。この生涯スポーツ論Iでは、人体の構造と機能及び疾病についての内容が多く、その解説にはパワーポイントなどの視覚教材は有効である。パワーポイントの利用法にあっては講義スピードが速く学生がノートをとることができないなど様々な問題が指摘されているが、その利用に関して少しでも問題を解決できればと思い、パワーポイントのスライドをコピーし受講者全員に配布している。そのスライドのコピーは、スクリーンに映し出されたスライドと全く同じではなく重要と思われる箇所は意図的に空欄にし、学生の注意をひき学生が直接書き込める資料となるようにしている。また、映像教材も取り入れ授業に参加していなければ体験できない内容としている。

公開授業を終えて再び考えると、学生には授業を通して自主的に視野を広げ自分の能力を発見し将来に役立ててほしいと思う。授業がそのような機会となることを目指さなければならぬと私自身強く考える。



■公開講義を終えて

総合経営学部 公共経営学科 准教授 崔 鍾植

4月から着任したばかりでばたばたとしている最中、FD委員会から「公開講義」をするように言われ、最初はちょっと戸惑いを感じたというのが率直な気持ちであった。平常どおり授業をすればよいとも言われたが、私には少なからず心理的負担となった。

6月22日火曜日4時限目に担当科目である「犯罪学」を公開講義として行った。本講義は、元々643号室であったが、人数が多すぎて大教室の961号に変更した。受講者名簿では1年生が100名、2年生が90名、3年生が59名、4年生が45名であり総数294名であった。最初は961号室でも決して余裕があるとは思えないくらい狭苦しい感じだったが、だんだん離脱する学生が増え、後には大抵半分から多くて200人くらいが出席するようになった。

当初、「公開講義」とは一般市民に対しても開放することかなと思ってしまった。さらに、今年4月着任したばかりだったので他の先生方の顔もまだ分からず、どなたがFD委員かは勿論知らず、3人の方が参観に来られることも知らなかった。当日、参加していただいた3人のFD委員のうち、2人の方とは講義開始の前、挨拶を交わしたので分かったが、もう一人の方はそのまま前の座席に座られたようだった。そのため、講義が終わるまで前に座られた方を一般市民の方と勘違いしてしまい、何度もその方を注視しながら説明を進めたりした。講義が終わってやっとその方も委員の一人だったことが分かって、苦笑するしかなかった。私は「公開授業」にかかわらず平素の通り講義をしようとしたが、FD委員の先生方が教室に座っておられることを全く無視することはできず、緊張したせいか、のどが渇き、困った覚えがある。

今年4月から、こちらの講義を担当することになり、はじめは学生たちの様子を観察することにした。授業での姿勢とか、反応とかいろいろ見てきたが、約3分の1の学生を除けば大抵は授業に集中していた。ただ、習慣的に私語に夢中になっている学生が多く、またすぐ寝てしまう学生が少なくないことが分かった。私語については最初から断固たる対応をとってほとんど治めることができた。常習的で堂々と(?)寝たり、遅刻したり、勝手に出入りしたりすることについても、何度も注意はしていたが、私の願うところまでは至らなかった。

このような状況の中で、どのようにしたら学生が楽しく講義に集中できるか工夫することにした。その結果、ほかの先生方も同じくやっておられることであろうが、第一に、視聴覚教材を多く使うことにした。パワーポイント(文章、図表など)とか映画(犯罪・刑事司法関連の映像)とかを混じえて使っている。話すだけよりもパワーポイントを使ったほうが効果は確かにあると思う。さらに、パワーポイントよりは時々映画とか他の映像資料を用いたほうが学生の集中力を高めるうえで、もっと

も効果があるのではないかとと思っている(ただし、講義内容と関連した、有益でよい映像資料の確保という問題はある)。私は集中力が足りない学生を相手とする場合、視聴覚教材ほど功を奏する方法はないと考えている。視聴覚教材を用いた日には、必ず感想を書いてもらっている。第二に、犯罪学だから、抽象的な話だけではなく、実際の犯罪事件を通して生き生きとした説明をすることにしている。毎回最近の犯罪事件の一つ取りあげて学生たちに配り、一緒に読みながら、その事件と関わっているポイントや争点を分かりやすく説明し、時々学生の見聞を聞いている。この方法は実際の事件を例として話すことなので、学生たちにも大変興味があるように見えた(ただ、学生に直接話させることは容易ではないようなが、それができる「教室の雰囲気」を作ることが大切ではないかと思う)。第三に、その日の講義の終わり頃になって、講義の内容と関連したクイズを出したり、質問を書いてもらったりして、それらについて次の時間に話し合うこともある。この方法は、人数が多い講座では出席チェックの代わりになるのでよく使っている。このやり方も学生の集中力を高め積極的に授業に参加させる方法の一つになると考える。第四に、授業のために教室に出ることを、友達と遊び場に来るように錯覚している学生が少なくないようである。本人たちのためには勿論、少なくとも真面目な学生たち(実際周りがうるさいと訴える学生も多い)の授業を受ける権利が侵害されないようにするためにも、授業に参加する基本的なエチケットやマナーについてももしっかり教えていきたい。

以上、私の経験からすると、「公開授業」は自分の講義の全般について一度みずからチェックして見たり、足りない点、不備点を補い、改善するという側面からは確かによかったのではないかとと思っている。

最後に、提案事項をいくつか書かせていただくことで、結びとしたい。第一に、新任の教員には、公開講義は着任してから半年か一年の猶予期間を設けていただきたい。第二に、教室にある機材の使い方がよく分からなかったりして何回も困った覚えがある。機材が古いせいもあったかもしれないが、その度に係の方に助けていただいて、大変感謝している。特に、新任の教員には機材の使い方について実演を通した事前説明の時間を設けてほしい。第三に、質の高い講義のためには、なるべく受講生を制限して適正の人数にする方策を講じてほしい。また、出席カードによって自動チェックできる出欠管理システムか、これに類似した方法を一日も早く導入してほしいと思う。

■公開授業全体報告会、開催される

教務課 鈴 加奈子

平成22年7月7日(水)、公開授業において授業の公開を引き受けていただいた教員の方がたと、FD委員会委員とで、公開授業の全体報告会が行われました。報告会では、担当教員より、公開授業の所感および普段の授業での悩み、工夫している点などの報告がなされました。報告内容は以下のとおりです。

<公開授業の所感>

- ・授業の方法について、今回の公開授業では意見をもらえて良い機会になった。
- ・学生の意見から、現行の授業方法で、ある程度いいのではないか、との結論も得られた。
- ・「声が小さい」などの意見も、改めて気付きになったのでよかった。
- ・自分の講義について自分でチェックするという意味で、いい機会になった。
- ・自分は形式にこだわった授業をしているのではないか、シラバスどおりに進めるだけの授業をしているだけではないか、との疑問が生じた。
- ・学生に対して高圧的になってはいないかなど、「このままではだめだ」という反省が残った。
- ・どのように授業を進めていけばいいのか、答えはまだ出ていないので、他の先生方からさらにアドバイスをいただきたい。

<授業における悩み>

- ・学生が間違ったところや困っているところ、つまずいたところを、教員が1つ1つ確認することが難しく、学生一人ひとりに対する気配りがかなり重要になる。
- ・授業の内容が幅広く概論的であるため、ふさわしいテキストがなく、授業の方法について困っている。
- ・プリント配布という形式をとっていたが、学生はプリントをもらうだけで安心してしまい、説明を聞かなかった。
- ・板書で授業を行うと、学生は話を聞いているが、理解度の向上にはつながっているかは疑問である。
- ・遅刻してきた各学生の遅刻の度合いを把握できないこと、途中で抜ける学生の対応に困っている。

<授業において工夫している点>

- ・授業においてパソコンを使っているため、学生が自分のペースで学修を進められる。
- ・各授業時間でノルマを課しているため、学生は一生懸命作業をしている。
- ・授業の最後に課題を出すようにしている。

- ・当初は一部の学生の私語に対して、厳しく対処することで収めていた(現在は私語が収まっている)。
- ・授業の進め方については視聴覚資料(パワーポイント、映画)をよく使うようにしている。口頭による説明のみよりもパワーポイントを利用の方が学生の集中力は上がる。また、パワーポイントを使っている時より映画の方が学生の集中力は上がっていると感じる。
- ・クイズを出して学生を授業に参加させるなど、人前で発表しやすい雰囲気を作るように心掛けている。
- ・2年生から4年生Kクラスまで混在しているクラスなので、簡単なテキストを使っている。
- ・授業は発表重視で進めており、「出席点」は認めないが、「発表点」を設けている。
- ・発表させる際、解答を導き出した理由まで問うことで、学生に考えさせることができる仕組みになっている。
- ・人前での発表ができない学生に対しては「発表用紙」を配付し、それを提出し、教員が読み上げることで発表に代えることも可能としている。
- ・パワーポイントを利用すると、学生からスピードが速いとの声が上がったため、現在はプリントを配付して書き込みをさせる形式をとっている。
- ・出席については毎回出席カードでとっており、出席カードをもとに学生に発言させるようにしている。
- ・授業が終わってから「まとめレポート」を課し、学生に考える機会を与えている。
- ・パワーポイントを用いることによって短縮できる筆記時間を、ビデオ視聴や新聞記事の提示などにあて、有効活用できる。
- ・講義においては「わかりやすさ」だけでなく、1年生には「関心が持てる」講義を、2年生以上の学生には「面白さが分かる」講義を目指し、受講生の興味や関心を刺激していく必要があると考える。

公開授業実施も3年目を迎えました。これまで、公開授業ごとに担当教員と参観教員との間での懇談会が個別に行われていましたが、それに追加して、今回は初めてこのような全体の報告会が行われました。公開授業を行って以降、どのように授業への工夫がなされたか、公開授業を行って得られた気づきなど、公開授業実施から報告会まで一定の時間をおいたことで、これまでの公開授業を終えてすぐに行われていた懇談会では出なかった点についてのお話も伺うことができ、公開授業の意義を考えさせられる良い機会になったと感じます。教務課としても、授業において様々な工夫をこらしておられる先生方のサポート体制を、より強化していかなければならないと思いました。

■ FD 研修会（於：滋賀県立大学）に参加して

経済学部 経済学科 講師 谷山 英祐

2010年5月7日に滋賀県立大学で行われたFD研修会に参加させて頂いた。以下、この研修会の内容を報告していく。

今回の研修会の講師は滋賀県立大学環境学部の倉茂好匡先生がお務めになり、「授業の基本③：学生の理解度確認—授業の双方向性の基本—」というテーマであった。実際の講義形式（流体力学の連続方程式）で研修会は進められたが、講義の前に本研修会での目的・手法などの説明が行われた。「学生は勉強したい、理解したい」というのが大学の講義の大前提であるから、学生が理解できるような講義を行い、講義は学生の理解度を確認しながら進めるべきである、というのが倉茂先生の基本的なメッセージである。したがって、講義中に学生の理解度を確認する作業が必要となるのであるが、学生が「授業に集中している」ときのサインは、居眠りをしている学生が少数、目を輝かせながら集中して聴いている、私語がない、とされ、逆に「理解していない」サインは、多数が寝ている（理解することをあきらめている）、私語が多い（話しを聞こうという気がない）、板書のみを必死に書き写している（なんだがわからないがとにかく書き写している）、などであるとの説明を受けた。

次に、数式を使う授業（本研修会の模擬講義：流体力学の連続方程式）では、とりわけ「学生の理解度確認」が重要であるとされ、その理由は滋賀県立大学の学生の基礎学力不足、近年の指導要領の変化（高校で微分方程式を履修していない！）などがあげられた。それゆえに、「基本項目」を丁寧に教える過程での「理解度確認」が絶対に必要である、と倉茂先生は強調されていた。さて、その「理解度確認」についてであるが、まず、目標とすべきは履修者の8割程度が理解できる内容を教えることが重視されていた。「授業がわからないなら自習しろ」という授業を行う意味はなく、「わかる」、「興味もてる」、「面白い」と学生に思わせることが重要であり、「この先生の言うとおりに勉強すれば、きっとわかるようになるのだ」と学生に確信させることが大事なことであり、と倉茂先生は説明されていた。これを実現するためには、授業展開の各段階で学生が十分に理解しているかどうかを確認し、理解不足の場合にはすぐに手当てする必要がある、「あとでまとめて確認」するのでは完全な手遅れとなることが多い、との説明を受けた。また、倉茂先生が考える理想の講義として、学生が基本事項を理解していること、数式展開を十分に追うことができ、数式を理解しながらノートを取っていること、授業中に「自力で解く練習」もできていること、宿題を出しそれに対するフォローがあること、の4点をあげていた。

以上は模擬講義の内容（数式を扱う講義）をふまえた指摘であるが、より一般的な「理解度確認」の方法も説明しておられたので、いくつか紹介しておきたい。まず、学生の表情を観察し学生のオーラを感じることで、具体的な発問を十分に準備する

こと、なにか作業をさせ期間巡視で確認すること（作業例：グループ・ワーク、グループ・ディスカッション）など。さらに、「しっかりノートをとらないといけない」しかけをつくること、たとえば、「ノートを取った内容をまとめた小レポートを授業の最後に書かせる」、あるいは、「ノートした内容と指定図書を読んで勉強した内容をもとにレポートを提出させる（学習ポートフォリオ法）」などの方法が紹介された。これらの「理解度確認」を行うためには教員がすべきこととして、授業のヤマをどこにつくるのかどう展開するのか、といった授業計画をつくること、なにを理解させるかそのための発問準備、作業の準備を行うこと、「テキスト通りに話す」のはダメな授業であると認識する、といったことが説明された。

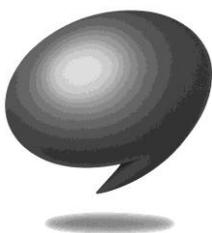


以上、FD研修会の内容紹介を述べてきたが、今回の研修会（模擬講義）の想定受講者数は50名程度、多くて70～80名程度であり、100名以上の大教室での双方向形式の講義はこの限りではない旨の説明があったことを付け加えておく。蛇足ながら個人的な（他大学での）経験を紹介させて頂くと、200名近い大教室での講義でも簡単なクイズを無作為に選んだ学生に答えさせ、その結果をふまえて他の学生に違う質問をするといった（完璧ではないが）双方向形式の講義は可能であったし、学生も積極的に参加・質問してくれた（出席をとっていないにもかかわらず8～9割の出席率であった）。最後に本研修会の感想を述べさせて頂くと、「学生は勉強したい、理解したい」という本研修会の大前提は正しい認識なのであろうか。本研修会で説明された双方向形式の講義は、最低限の意欲のある学生が一定数以上いる場合に限りられると思われる。とはいえ、本研修会に参加させて頂き大変勉強になった、講師を務めて下さった滋賀県立大学の倉茂先生に厚く御礼を申し上げます。

■編集後記■

今回で3年目となる公開授業を実施しました。本号の鈴さんの寄稿にもあるように、個別の授業の‘反省会’に加えて、今年から新たにFD委員会のメンバーと担当教員全員との‘全体反省会’をスタートさせました。これが結構おもしろいのです。普段は教員個人としての悩みや戸惑いが、この‘全体反省会’を通じて集団としての教員組織にもある程度共通したものであることがわかりました。そうすると、個々の問題と全体の課題が浮かび上がってきます。ますますFD委員会の活動のポイントが見えてくるような気がします。(FD委員会 委員長 前田 啓一)

今年の夏はとても暑いですね。残暑も厳しく、いつになったら冬が来るのだろう、といった感じです。こんなことを言っておいて、冬になったら今度は、「いつになったらあったかくなるんや…」とか言ってそうですが、今月の後半には後期の授業が始まります。何かとお忙しいでしょうが、くれぐれもご自愛ください。(教務課 鈴)



大阪商業大学 FDニューズレター 第7号

発行日：2010年9月1日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438